創刊10周年記念特集Ⅲ 新時代の幕開けと日本人の世界観

宇宙時代の哲学を探る

輪廻転生の法則と〝宇宙意識〟への覚醒―人類の進むべき道をいちはやく指し示したアダムスキー哲学を軸に、さらに日本人の可能性にも言及する。従来の世界観にコペルニクス的転回を迫まり、新世界の到来を告知する！

久保田八郎
〈宇宙哲学研究家〉

「さあ私の魂よ、出発しなければならない」

一六五〇年二月十一日、五十歳で生涯を終える直前にルネ・デカルトが残したこの最後の言葉には、近世合理哲学の祖らしかぬ転生の思想めいた響きがある。

転生（生まれかわり）の概念は古来東洋において発達していた。ピタゴラスやプラトンらも霊魂不滅説をとなえていたが、これには因果応報の思想までは含まれていない。ところが古代インドでは人間の行為が死後の運命を規定するという意味で「カルマン」という語が一般化し、これに対しウパニシャッドの哲人、ヤージュニャヴァルキャが明確な語義を与えた。それによると、善き業（ごう）によって善き運命をつくり、悪しき業によって悪しき運命をつくるというのだが、この概念が次第に発展して転生の考え方が確立されるのである。

しかし科学的な実証がともなわぬ限り、概念はあくまでも概念であって、生まれかわりという現象は存在する「のだろう」の域を一歩も出るものではない。しかし近代の催眠術の発達により、転生の問題が科学的に研究されるようになったことは、人間の生命の神秘の解明に画期的な役割を果たすことになるだろう。

一人の被験者に逆行催眠をかけて潜在意識下の記憶をよみがえらせ、それを次第に逆行させて過去世の記憶までも引き出そうという実験は、米アリゾナ州スコッデールの催眠センター所長ディック・サトフェンをはじめとして、各国の進歩的な科学者により試みられている。こうして人間の生涯は一回限りではないという事実が明確にされるならば、これだけでも人間の対社会観や価値観は大きく変化するだろう。

このような転生思想を基盤にして宇宙的な哲学を展開した人にジョージ・アダムスキーがいる。ここでは彼の思想を主体にして、西洋哲学が認識し得なかった生命の連続の法則と、人間の内奥に秘められた偉大な能力について述べることにしよう。

直感力の開発が重要

古来、東洋人は直感力を重んじる民族であった。物事を論理的に考える西洋人の理屈っぽさとは裏腹に、東洋人――特に日本人は以心伝心的な〝腹芸〟で対処しようとする。早くいえば腹の探り合いを行なうのだが、実は、これは人間の内部に存在するテレパシー能力の無意識な行使なのである。そしてこの能力の開発こそ人類の黄金時代を築くための不可欠な要素なのだ。

結論からいうと、人間にはすべてテレパシーの能力が潜在しており、自己訓練によってだれでもその能力を開発できるのだが、長い時代を通じてつちかわれた唯物観により、その事実に気づかず、眠らせて退化させているのである。

アメリカの原子力潜水艦ノーティラス号は、かって五百キロメートル離れた洋上で、米本土の研究センターとテレパシーの実験を試みて成功した。いまから二十年近い昔の一九五九年の夏だ。しかも艦は海中に潜航し、乗り組んだ被験者Aは、陸地の被験者Bから発せられる〝想念波〟によりESPカード（テレパシー開発訓練用としてデューク大学超心理研究所のゼナー教授が考案した五種類の図形を記したカード）の図形を受信して用紙に解答を記入した。この実験は厳重な監視下で十六日間実施され、偶然の確率は二十パーセントなのに、Aの適中率は七十パーセントという驚くべき成績を示した。こうして電波にかわって傍受不可能な〝念波〟による通信の時代の幕が切り落とされたのである。

現在、米ソ両国ではテレパシー通信の発達をめざして猛烈

な研究が行なわれており、将来は宇宙開発に応用される可能性も出てきた。大気圏外の別な惑星に高度に進化した人類が存在するとすれば、時代遅れの電波よりもテレパシー通信がてっとりばやい方法なのである。だいいち、人間がすべてテレパシーの能力を持てば世の中は大幅に変化するだろう。人間の社会にトラブルの絶えまがないのは、他人の心が見抜けないために疑惑が生じるからである。この疑惑こそは人間を地獄に落とす悪魔であって、我々はみずから悪魔を自分の内部で培養し、ひとりで苦悩するのだ。つまり人間は一寸先も見えぬ盲目であり、人生は暗黒なのである。しかも権謀術数や陥穽の渦巻く醜悪な現世で自己の身を守るのは容易ではない。だが狡猾な他人やデタラメな社会構造を恨むまえに、人は自身の一大欠陥を認めて、これを恨むべきだ。その欠陥とは直感力のなさ、すなわちテレパシー能力の欠如である。これがないからこそ地球上には無数の主義主張が生じ、バランスを保とうとして力と力の対決が起こるのである。

歴史をみればわかるが、およそ宗教や哲学が人間世界の調和に役立ったためしがない。むしろそれらは争いを起こし、社会を泥沼と化さしめる。結局、これらは観念の遊戯にすぎないのだ。こうしたものがはびこる要因は人体のもつ無限の可能性に対する考察を忘れたところにある。カントやヘーゲルが人間にいかなる影響を与えたかは知らぬが、少なくともカント哲学を知っていたおかげで商談に際して悪質な相手にだまされずにすんだという例はないだろう。一哲学者の頭の中でひねり出された理論よりも、自身の内部にひそむ偉大な潜在能力、すなわち直感力を開発するほうがはるかに有利であり、しかもこれこそ宇宙的な生き方なのである。なぜなら人間ばかりか万物が一種の宇宙語ともいうべき意識による会話を交わしているからだ。これに気づいて〝宇宙の意識〟を中心にした生き方をしない限り、人間同士の真の調和は生じないだろう。

〝宇宙の意識〟とマインド

どうすればテレパシックな直感力を開発できるか。方法は簡単である。人体は無数の原子から成り立っているが、その原子群を凝縮せしめて超精密な複雑きわまりない機能をつくりあげている根源的なパワーの存在をまず知る必要がある。このパワーは盲目的なものではなく、意志と英知とを有していることは肉体を少し観察すれば容易にわかる。しかもこれはユニバーサルなものであるから、このパワーを〝宇宙の意識〟と名づける。つまり宇宙全体は意識的な有機体なのである。このことを証明するには多くの紙数を要するが、あまりむつかしく考える必要はない。大体に人間は単純な物事を複雑にしすぎる傾向がある。その結果、科学は大きな幹を見失って末梢の細事ばかりにとらわれるようになった。

さて、人間はマインド（心）によって思考し、推理し、結論を出す。しかしこのマインドなるものは肉体に付属する機関であって、肉体の死とともに消滅する、いわば一時的な現象である。それはいい加減な存在であって絶対的なものではない。だからマインドによる推理にはときとして誤りが生じ、疑心暗鬼の状態になったりする。ところが内部に宿る〝宇宙の意識〟は宇宙語を話す全知者であり、これがマインドに対して正確な情報を伝えようとするのだが、通常マインドはそのことに気づかない。しかしときとしてマインドはすばらしいアイデアをキャッチし、「どこからこんな考えがわき起こるのだろう」と不思議がる。これは内部の〝宇宙の意識〟から来る情報に対してマインドが受容的になったからである。この現象は大体に〝印象〟というかたちで現われる。したがって、マインドを静めて内奥の声なき声にマインドの耳を傾けるようにすれば、いつでも正確な印象を感受できるのである。

ところが人間のマインドは騒乱に満ちており、たまに印象が来ても無視したりする。この理由は次のとおりである。

人体に付属するマインドは、大体に四種の感覚器官――眼、耳、鼻、口の勝手な解釈によって形成されているのである。つまり眼を形成する細胞群は外界に対して独自な解釈をし、一方、耳を形成する細胞群は外部からの音響により別な解釈をする。そこで両者間に不和と争いが生じ、その結果、マインドは混乱する。例をあげると、一人の女性が出現したのをまず眼が感知する。そして美しいと判断する。ところがその女性の話す言葉を聞いた耳は、無教養で不快な言葉だと解釈する。そして両者は対立する。そのためにマインドは混乱し、女性に対する明確な批判力を失うことになる。こうしたことが我々の日常生活でさらに行なわれていて、結局、人間は迷うのである。

眼や耳が勝手に解釈するとはとんでもないという人があるだろうが、実は網膜が――正確にいうと網膜を形成する細胞群が――独自な解釈をして、その信号を脳へ送っている事実を東北大の学長だった本山博士が発見し、ノーベル賞ものになるところを外国の学者に先を越されたという例があった。このようなことはすでに科学的に立証されているのである。

人間は長い時代を通じてこの四官を混乱させてきた。というよりも四官に振り回されて生きてきた。だからいわゆる心の迷いが生じ、正確な感知力が発達しないのである。したがって、まず四官をコントロールして、マインドの統一と調和を図る必要がある。それがマインドの澄みきった状態なのだ。そして内奥から来る〝宇宙の意識〟のささやきを聞くように自己訓練をしなければならない。こうした人体の感覚器

官の統一と発達をなしとげない限り、言語による主義主張をどんなにとなえても無意味である。

触覚が基本要素

遠隔地にいる人の想念をキャッチする場合も、やはりマインドと〝宇宙の意識〟とを一体化させねばならない。想念波なるものはまだ科学的に測定不可能だが、これの存在については多くのテレパシー実験によって否定しがたい結果が出ている。人間の想念は電波のように空間へ放射されると思われるが、距離と速度は無関係だといわれている。つまりテレパシー現象にはニュートンの逆二乗の法則はあてはまらぬのだ。イギリスの高名な超心理学者キャリントンは、テレパシー現象の主体となるべき媒体はエネルギーではなく、別な因子によるものだと述べている。それが何であるにせよ、多数の実例からみて一種の〝波動〟であることに間違いはあるまい。

この波動をキャッチするのは全身の細胞であって、特定の一器官ではない。そして細胞中に存在する感受要素がメッセージを脳に伝達し、そこで増幅されてマインドに伝えられる。そもそも人体は全身が触覚器官だといってもよいほどに感知力に満ちている。したがって感知という現象は接触作用によって生じるのである。四官、すなわち眼、身、鼻、口のいずれも外界から来る波動や物質との接触により、その機能を果たすが、これら全部を取り除いても人間が生きることは可能である。なぜなら皮膚の触感により自己の存在を確認できるからだ。この触感を生ぜしめる根源なるものもやはり触覚的なものである。すなわち人体を生かす〝宇宙の意識〟は一種の触覚なのであり、外界との接触作用によって意識的な実体となるのである。したがって人体から生じるマインドを静めることにより、内部の意識――これは全身の細胞に遍満するものであるが――は、外界から来る波動のすべてを感知して、それをマインドに伝えるのである。

そうなれば、我々にとって不可知な物事はなくなるだろう。他人の想念内容を知ることはもちろん、切迫した巨大地震の発生時期も感知できるし、気象の変化の予知も可能になるはずである。また視覚的メッセージの受信すなわち遠隔透視も可能になる。

テレビ受像器の助けをかりずに遠方の光景を透視したり紛失物を探り出したりする。このような能力をもつ人は少数ながら存在する。日本人では亀田一弘氏が大透視能力者としてその分野で著名である。

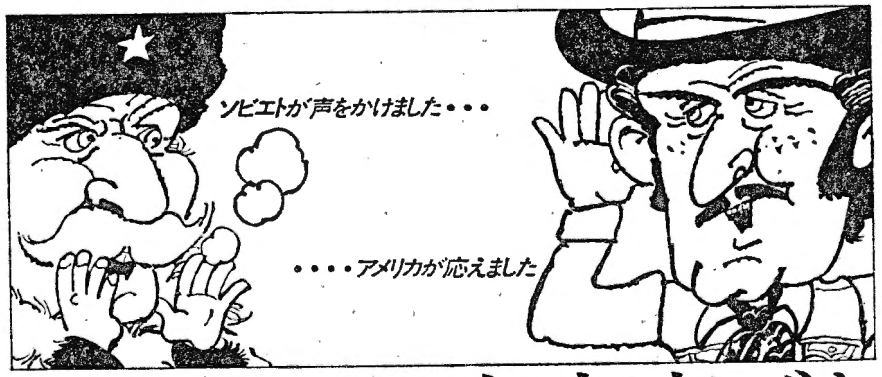
問題は現代人がこうした能力を一笑に付して頭から無視する点にある。多少の関心をもつ人でも〝超能力〟と称して、一般人よりは別次元の謎とみなす。だが人体の研究ともろもろの神秘現象が解明されるにつれて、テレパシー能力の開発が重視されるようになるだろう。そして初めに述べた転生の問題とともに二十一世紀の重要な課題となるだろう。全人類がテレパシックな直感力を発達させて互いに面と向き合ったまま、微笑を浮かべてテレパシーによる無言の会話を行なう光景が見られるときこそ真の宇宙時代である。それはおそらく来世紀に実現するだろう。

テレパシーの練習法

テレパシーの練習は困難ではない。必要なのは忍耐力である。以下、方法を述べることにしよう。

一人で行なう場合は、まずトランプのカードを用意し、それを切って伏せたまま机上に雑然と並べ、赤か黒かを予知するフィーリングを起こしながら、ひっくり返す。かなり的中するようになったら、赤の2、黒の3などと数字をあてたりする。二人の人が室内で向かい合って、ESPカードの図形を送受信する。Aが一つの図形のイメージを心中に明瞭に描いて送信するのをBが言いあてるのである。この場合、重要なのはAを生かす〝宇宙の意識〟とBのそれとは一体であるというフィーリングを両者が起こすことである。

一本の樹木に接近して、その樹木を生かす〝宇宙の意識〟と自分のそれとは一体であるというフィーリングを起こしな



まとめ役は住友商事です。

米デュポン社の技術をソ連に輸出

総合商社の役割は、日本を中心とする貿易だけではありません。新しい技術や物資を求めている国があれば、それを提供できる国を紹介し、とりまとめるのも大切な仕事のひとつです。先年、米国住友商事が手がけた米ソ間プラント輸出は、日本の総合商社としては初めてのケースという点でも意義の深いものでした。海外80ヵ国に123の支店を持つ住友商事のグローバルなネットワークが見事に活かされたのです。

住友商事

がら、われが木か、木がわれかという感覚を高めてゆく。これを練習し続けると、やがては樹木の内部を流れる樹液や、地中をはっている根の位置などが感知できるか、透視できるようになる。

海岸へ行く。砂浜にすわって水面を見つめながら、海水中に自分の体をつけたイメージを描き、爽快な気分を起こすようにする。やがて水の波動との接触により、実際に体が冷えてくる。

ただしこの練習は冬には避けるほうがよい。

電話がかかってきても無造作に受話器を取り上げないで、ちょっと待ってみて、この電話はだれから何の用事でかかってきたかを感知するようにする。

郵便物が来ても同様である。いきなり封を切らないで、封筒を両方のてのひらにはさんで、いかなる用件が書かれてあるかを感知する。

親しい友人と打ち合わせて、夜間の一定時刻に遠くにいるAがBにテレパシーでメッセージを送信する。解答は電話で伝えればよい。

電車に乗っているとき、少し離れて立っている人にむかって、こちらを向きなさいと送信する。相手がそのようにすれば伝達は成功だが、人によっては受信力の低い人もいるので、不成功の場合、失望してはいけない。

遠隔透視の練習は常に一人で行なうほうがよい。夜間、寝静まった頃をみはからって、自室の壁に三十センチ四方ぐらいの白い紙を粘り、これをスクリーンとして凝視しながら遠方の一定場所、たとえば知人の居室内等を透視する。最初は何も見えぬが、練習を続けるうちにモヤモヤしたものが見えるようになり、次第に輪郭が鮮明になってくる。

または瞑目して透視練習を続けてもよい。

その他、練習法は考案すればいくらでもある。要は忍耐強く続けることだ。この練習には金がかからぬ上に解答はすぐ出てくるから、これほど容易な自己開発法はない。

最も重要なのは、「自分にもこうした能力が潜在する。それはかならず出てくるのだ！」という確固たる信念をもつことである。単なる興味本位ではだめで、宇宙的感覚をもつ真の意味でのコズミック・マン（宇宙人）になろうという大いなる欲求を起こすことが大切である。

日本人はテレパシックな民族

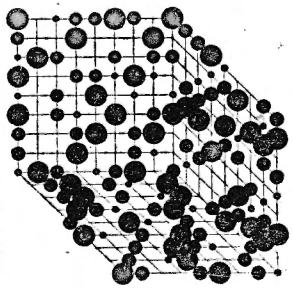
こうした鋭敏な感覚を増大させるには、日本人が最適である。前述のように日本人は論理よりも直感を重んじる民族であり、体質的にテレパシックな要素をもっているのである。だから日本では宗教が育たなかった。仏教もキリスト教も日本人の生活に根ざすほどには定着しなかった。こうした宗教

を必要としないほどに日本人自体が本来コズミックな人間なのである。その日本人を堕落させたのは誤った唯物教育である。もともと科学に弱い――というよりも論理的思考に乏しい日本人は〝科学的〟という言葉に陶酔し、科学を盲信するようになった。もちろんテレパシー現象も究極には物理的なものであり、それなりに解明されねばならないが、こうした未知の分野の探求を科学盲信が逆に妨げる結果になったのである。

宗教とは何か？　一口に言えば偶像崇拝である。その偶像が仏像であれ十字架であれ、礼拝によって心の安らぎを得ようとする裏には自己喪失がある。宗教とは大衆に一種の自己催眠作用を起こさせる催眠術師の集団と称しても過言ではない。日本人がこの催眠術にかかったのは古代の仏教の導入からである。原始仏教とは大幅に異なる変形された宗教と教義の誤った解釈により、天性おおらかで同化性に富んだ日本人は一時期厭世思想をもつに至ったが、これも近代の西洋文化の吸収により、希薄になってしまった。しかし西洋の宗教はほとんど未消化に終わり、結局、日本人の体質は外来宗教に汚染されることなく本来の状態を維持できた。これは日本人特有の豊かな感受性と万物との一体感が要因をなしている。今さら、愛や慈悲の徳などを説かなくても、皆、兄弟で友達だという家族主義的な和の精神が日本人の骨髄をつらぬいているのだ。「日本人は安全と水はタダで手にはいると思っている」とイザヤ・ベンダサンは批判したが、国土の地理的条件に加えて、日本人には安全と水に対する危機感が乏しいというよりもむしろ、これらとの一体感が強かったのである。水はわれらとともにあり、平安もわれらとともにあるというこの茫洋たる同化感覚は、大昔、万物は一体であるという宇宙の法則を体得していた偉大な栄光である民族の精神の流れをくんでいるのだ。

化学、
価値の創造。

人間社会の進歩・発展はとどまるところを知りませんが、"これを可能にするのは、現代化学による技術革新、といってもいいでしょう。　デンカは、総合化学企業のワイドな技術を結集、多様化・高度化するニーズを的確に把握、生活に真に価値あるものの創造をつづけます。



チャレンジする化学
デンカ
電気化学工業株式会社
東京都千代田区有楽町1-4-1　郵便番号100
電話 03-507-5071（広報部）
プラスチック
合成ゴム
化学肥料
カーバイド
合金鉄
セラミックス
セメント

ムー大陸と日本民族

その栄光ある民族とは何か。ずばりいうと一万二千年前の太古、太平洋に存在し、大帝国として繁栄したあと、突如発生した不可解な大変動により海中に没したムー大陸人である。これについてはイギリスのジェームズ・チャーチワードによる大研究の成果が残っている。一八八六年にインドで軍務に服していた当時、ヒンズー教の高僧から不思議な文字を刻んだナーカルの粘土板を見せられ、それがムー大陸の聖典『聖なる霊感の書』の復刻であることを知った彼は、以後五十年にわたって猛烈な研究を続け、ムー大陸実在の証拠をつきとめた。

ムー大陸人は宇宙の創造パワーに対する崇拝思想をもち、太陽を創造主の象徴とみなしていた。住民は愛と調和の精神に徹し、戦争も不和もなく、高度な科学技術の発達とあいまって、宇宙的な雰囲気に満ちた素晴らしい大帝国を建設していた。王位継承者は『ラ』という太陽の称号を与えられたが、神そのものとして崇拝することは禁じられた。人間として傑出した存在であり、国民によって選出されたのである。また住民のすべてはテレパシーの能力を有し、人体を生かす創造パワーを完ぺきに理解していた。要するに現文明人が足もとにも及ばぬほど高い進化をとげていたのだ。

この大文明国が海中に沈下した理由は不明である。一方の雄アトランティス大陸との核戦争による結果だという説もあるが、それはともかくとして、海中沈下以前に大陸外へ雄飛したムー人がいた。これが太古のマヤ族で、北・中南米に移住したカラ・マヤ族（後にはアメリカ・インディアンや中南米のマヤ、インディオの祖となった）、ビルマ、インド方面へ定住したナガ・マヤ族（現代ビルマ人やインド人の祖となる）、中央アジアから中部ヨーロッパに大帝国を築いてアーリア人の祖先となったウィグル・マヤ等がある。そして極東に住みついたマヤの一群もいたが、このなかに原日本人の祖となった一族がいた。これがアイヌ人の祖先である。一方、南方から北上した雑種マヤ人は日本列島を発見後、アイヌ人を駆逐したり同化したりして、単一民族を形成した。こうして日本民族が誕生するが、もとはといえばムー大陸人の後裔である。しかも都合のよいことに四方を海で囲まれている国土は外敵の侵略や脅威をうけない。そのためにムーから伝えられた宇宙的な和の思想は比較的高純度を保って温存され、世代間を脈打って流れた。こうして日本人の直感的、吸収的な特性も受けつがれていったのである。

転生の法則

話をもとにもどすことにしよう。少年時代にチベットへ留

学して東洋の秘学を学んだアダムスキーは、インド哲学にも関心をもち、古代ヨガにも造詣が深かった。この古代ヨガはナガ・マヤ族がもたらしたムー大陸の神性開発の秘法なのである。それがくずれにくずれて無残な姿になったのが現代ヨガであり、密教なのだが、現在もヒマラヤ奥地に古代ヨガの流れをくむ聖者が少数存在し、不思議な能力を駆使しているという。

しかし宇宙の法則に従った生き方とは、単なる超能力の発現をめざすことではない。深山にこもって自己の潜在能力の開発に生涯をすごすよりは、市井で働きながら隣人に愛をもって接し、援助を続けるほうがユニバーサルな生き方である。そもそもテレパシーや透視力等の開発に人里離れた特定の地域を必要とはしない。それが汎宇宙的なものであれば当然どこでも自己訓練が行なえるはずだし、また、それでなくては意味をなさないのだ。

その意味でアダムスキーが展開したテレパシー練習法や生命科学による生き方は画期的である。

既述のとおり、彼によると人間に潜在する能力は〝宇宙の意識〟から洩らされる印象により、テレパシー現象、透視力となって現われるが、この能力は転生によって受けつがれるという。つまり過去世でこうした能力を開発すれば、それは現世でも発現するのである。いわゆる天才児とは過去世での知識と技術の蓄積が今生で開発したものといえる。

アダムスキーによると、転生の間隙は瞬間的なものであるという。具体的にいうと、一生涯を終えた人間の実体が肉体を離れて別な肉体へ移行する時間は平均三秒であり、数か月や数年も要することはない。したがって、人間の死後に霊魂が行くといわれる霊界なるものは実は存在しないし、死者の霊が霊媒を通じて語るという霊界通信なるものもあり得ない。霊媒がトランス状態になって、いかにも死者の言葉を語るようにみえるのは、実は霊媒の肉体内の細胞の記憶から発せられる情報を増幅しているか、または死者が生前に残した残留意識や波動をキャッチしているにすぎない。

会員　募集

日本GAP

UFOと宇宙哲学の研究グループ

わが国UFO研究界の先駆者久保田八郎はジョージ・アダムスキー研究家としても著名であるが、1961年よりアダムスキー主宰の世界GAP（知らせる運動）組織網の日本代表となり日本GAPを設立。以来あらゆる困難と障害を乗り越えてアダムスキーの特異な体験と宇宙的哲学の促進活動を展開してきた。機関紙「GAPニューズレター」はすでに64号まで発行。毎月東京文化会館の月例会で宇宙哲学を指導し、宇宙の法則と人間の真の生き方を探究。大阪・高知・熊本・新潟・岐阜・福知山・仙台・山形・札幌各支部設立。個人的奉仕活動として啓蒙運動を続行中である。真剣な探求者の参加を歓迎している。

不定期刊機関誌

GAPニューズレター

●第64号発行中　●本格的活版印刷・B5版・極上アート紙40頁●UFOに関連し他惑星における偉大な人類存在の認識と宇宙法則の探求専門誌

主要記事題　エゴを支配する道　G・アダムスキー　人間とは何か　P・ステックリング　G・アダムスキー財団について　S・ホワイティング　UFOと日本人　久保田八郎／その他有益な記事写真満載

●入会希望者はハガキに「入会案内書希望月刊ペン11月号」と明記してお申込み下さい。入会は高校生以上に限ります。非会員に機関誌の一冊売りはしません。

〒133 東京都江戸川区本一色町365－818

日本GAP

Tel. 651-0958

こうした心霊主義やオカルティズムが人間の宇宙的覚醒を大きく阻害していることは宗教と同様である。アダムスキーの説く宇宙哲学は人体の隠された機能を科学的に解明して駆使しようとする生命の科学であり、未来の人間像の先取りであるといえよう。

死者の実体（霊魂ではなく、意識体というほうが適切である）が新しい肉体（新生児）へ移行する時間は平均三秒と述べたが、その移行は新生児が母胎の体内からでてきて最初の空気を吸った瞬間である。それまでの胎児は母親の体を生かしている〝宇宙の意識〟によってともに母体内で生かされているが、まだ実体なき肉塊にすぎない。

実体がいかなる遠隔地へ移行しようとも所要時間が常に三秒であるということは、三次元世界を超えた未知のエネルギー媒体が存在すると考えられるが、詳細は不明である。しかもこの三秒間で死者の実体は地球から別な人類の住む他の惑星にまで移行することもある。つまり惑星から惑星への転生である。コーネル大学の高名な学者カール・サガン博士は、この銀河系宇宙には少なくとも人間の住む惑星が二百万個以上はあるといっている。おそらくもっと無数の惑星に人類が住んでいるのではなかろうか。そのなかには精神・科学とも地球をはるかに陵駕した大文明星もあれば、地球を下まわる低劣な惑星もあるだろう。人間にとって、これらは一種の宇宙の教室であり、転々と転生を繰り返しながら進化をとげてゆく。

ただし人間は無限に転生するのではない。生まれ変わりの回数は一人につき十五、六回で、その間に本人のマインドが宇宙の法則に気づかず、宇宙の波に乗らない場合は、十五、六回目を最後として、本人の実体は宇宙の意識の大海の中に吸収されて消滅してしまうが、宇宙の法則に目覚めて宇宙の波に乗れば、十五、六回の転生回数が延長されて、無限に進歩を続けてゆく可能性が生じるのである。

したがってすべての人間の生命が永遠というわけではない。向上する意欲のない、いわば魂の腐った人間に、いつまでもだらだらと転生を繰り返させるのは不公平であり、法則性がないことになる。カルマの法則が空間内に厳然と存在するものならば、当然これも転生に適用されて淘汰の法則が働くだろう。まじめに努力する者が昇進し、怠けて役に立たぬ者が排除されるのは企業体の常だが、実はこれも転生の法則の応用なのである。

危難を突破する生き方

しかしいまや地球上の状勢は予測を許さぬほど深刻になってきた。特に一九八五年までに米ソの衝突による第三次大戦は不可避であろうと軍事評論家筋は見ている。この次大戦が

勃発すれば全面核戦争になることは必至である。米ソ首脳部も人間だからそんなバカな事をやるわけがないと考えるのは素人であり、事態はそう甘くはない。地球人のマインドの潜在部分には狂的なものが秘められており、これがいつ爆発するかわからない。

いずれはエネルギー資源を求めて大国が狂奔し、食糧の奪い合いで弱小国が蹂躙されることは現状からみて不可避である。そのとき一秒でも早くボタンを押した国が完全に無きずで生き残るわけではない。核戦争になった場合、アメリカは全人口の七割が死滅するという。この恐るべき事態は刻々とせまっている。このまま何事も起こらずに世界が調和した平和な世界になることは絶対にあり得ない。むしろ死と絶滅の影が世界を覆いつつあるのだ。日本人としての我々はどうすればよいか——。

本稿で述べた宇宙哲学をいかに唱え、実践しても、巨大戦争の前には無意味だろうか。ナンセンスか。夢想家のたわごとか。

たわごとではないのだ。このような哲学の実践こそ米ソ両首脳部に戦争抑制のフィーリングを起こさせる原動力となるのである。これには人数の多寡を問わない。少数ながらも結束して強烈なテレパシー送信を両国首脳部に行なうのだ。これは何らかの効果があるはずで、防止にある程度役立つだろう。とにかく地球人は必死になって戦争を防止しなくてはいけない。今度大戦が始まったら一巻の終りである。役にも立たぬ理論や哲学を百万だら唱えるよりも、生きた生命の科学を実践することが急務なのだが、それでも我々の力があまりに無力で、すさまじい大戦となった場合でも、宇宙哲学の実践者には内部の意識から生き残るための指導の啓示が洩らされるだろう。

人間を救うものは偶像ではない。自身の内奥に存在する〝宇宙の意識〟そのものである。だから要するに自分が自分の救い手にほかならないのだ。他のだれも救ってはくれない。情感的な日本人は大昔から天性としてこのことを知覚していた栄光ある民族であった。古代においては知恵の木の実たる文字をもたず、大自然の驚異と畏怖とを感じ取る直感力豊かな民族であった。

この栄光ある状態に返る前に大変動で大部分の日本人が消滅し去るのは惜しみてもあまりある。いまからでも遅くはない。多くの同胞が偶像崇拝をやめ、教団教祖の催眠術から脱し、まず自己の内部を見つめ、自然界の警異を感じて、そこに宿る宇宙の創造パワーを知覚し、マインドをそれに近づけて一体化させるなら救いの声が聞こえてくるのだ。永遠に生きる道を示す声が——。